

② 予測結果の概要

予測結果の概要を表 1.31～表 1.32に示す。

表 1.31 予測結果の概要(造成地の存在)

項目	予測結果の概要
地下水流動	予測計算の結果によれば、地下水の流動方向や流速には大きな変化は生じず、地下水位の低下量は最大 0.5m 程度でその範囲は△△湧水近傍の局所的範囲にとどまる。 一方、△△湧水の湧水量は現況の約 75%に減少する。 現況湧水量：590m³/日 → 造成後湧水量：440m³/日
粘性土層の 圧密沈下	上記予測結果による地下水位低下に伴って各土層に作用する増加応力は、各粘性土層の圧密降伏応力以下の値であるため、基本的に沈下の問題は発生しないと予測される。

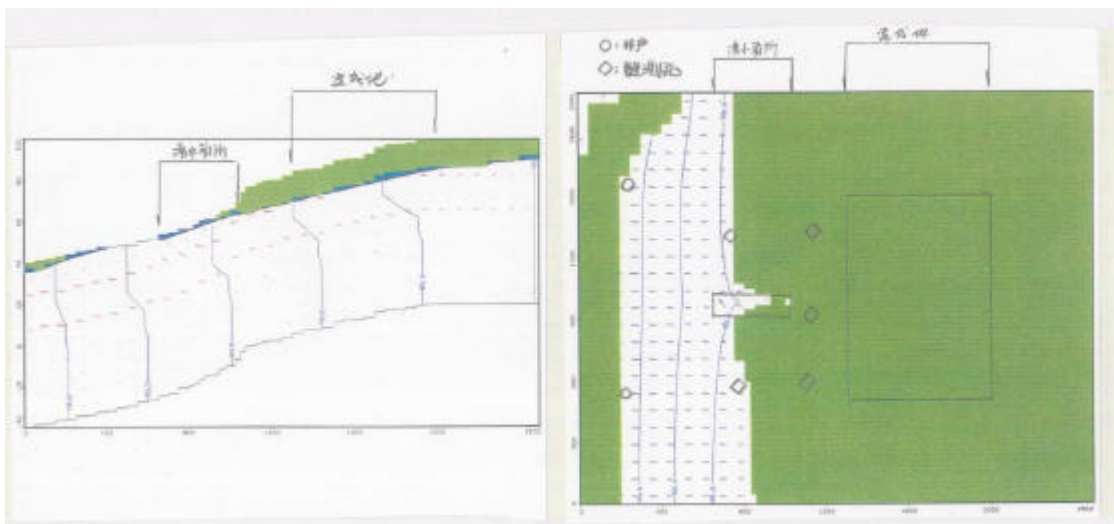


図 1.42 造成地の存在時の地下水断面図(左)と地下水面等高線図(右)

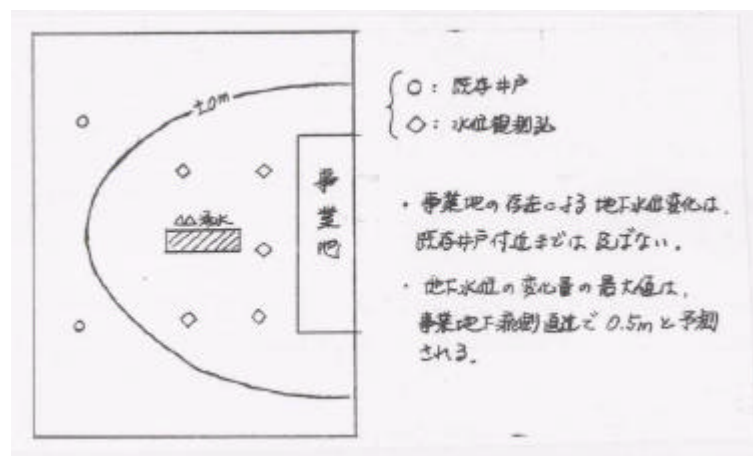


図 1.43 造成地の存在に伴う地下水位の変化量図

表 1.32 予測結果の概要(造成工事の実施)

項目	予測結果の概要
地下水の水質	予測計算の結果によれば，造成工事に伴って発生した汚濁物質は次第に拡散しながら下流側へと移動する。 工事開始から約1ヶ月(30日後)の時点では，下流方向への汚濁物質の移動が生じるものの△△湧水の水質に変化は生じない。 その後，徐々に汚濁物質の濃度が上昇し，概ね100日後に最大値に達する(75 mg/ℓ程度)。汚濁物質濃度は，その後次第に低下するが，200日後の時点でも数 mg/ℓ程度の増加分は残存する。

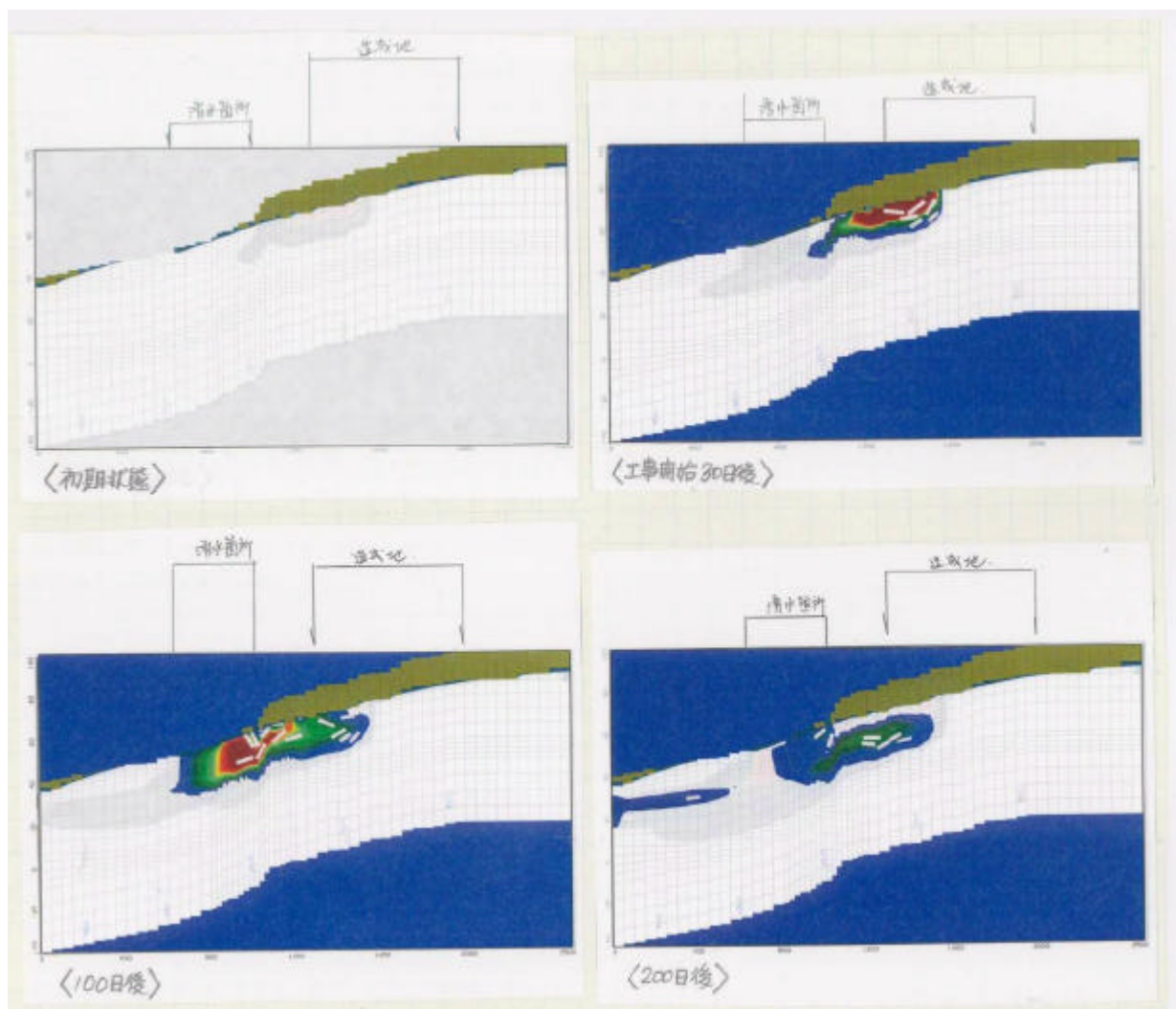


図 1.44 造成工事の実施による地下水質変化の予測結果